

泥棒とイーダ

第05回 ここに居てもいい資格

牧田真有子

翌朝史乃と顔を合わせてようやく、そういえば彼女はどこまで見ていただろうと思った。あのあと、対岸の手すりにぶつかるとともに戻った私が、腰を抜かしそうになりながら柵の内側へ戻ると彼女の姿はなかったのだ。足ががくがくしてまともに歩けなかった。屋上の真ん中まで這っていった私は、冷えたコンクリートの上にはばらく寝転んで体がまとまるのを待ち、家に帰った。

飛び移る最中の、自分の裏側の一点にすっと吸いとられて全部が閉じるような感覚。一晚経った今も、ややもするとよみがえってくる。

一時限目は英語だった。私は机の端に辞書を置いて着席していた。忘れてきたらしい史乃が、私の目の前で悠々と私の辞書を持ち去ろうとした。その手首を掴み、辞書を奪い返して私は言った。

「ありがたい、もういいの」

は？ と史乃は少しかすれた声で言った。悠然として見せていても気持ちはやはり、昨日の出来事に引っ張られているのがわかった。もう一度彼女は辞書に手をかけた。私は辞書から手を離さなかった。史乃は一度力を緩めてから全力で引っ張るといふフェイントめいた行為にまで出た。私はするりと手のひらから抜けそうになった辞書に、空中で追いついて両足を踏ん張り、相手の十本の指からもぎとった。机の定位置に辞書を戻して言った。

「ありがたい、もういいの。史乃に借りを作ったことは絶対覚えておくから」

史乃はこの上なく的確な軽蔑の表情を浮かべ、英語の教師と入れ違いで帰っていった。辞書に掛けられた透明のカバーは大きく破れていた。

休み時間に、それをくしゃくしゃと丸めてゴミ箱へ捨てに行くと、近くで友達とふざけていた沼男ぬまおが「おっ捨てちゃうの。エコはどうした、エコは」と声をかけてきた。

「再利用の方法が思いつかない」私は言った。

「騒動のすさまじさを今に伝える遺物じゃん。展示するか、掲示板に」私は苦笑して彼の方に体を向けた。沼男は私の顔をかなりきついまなざしでじっと見ていた。本人がそのことをどこまで自覚しているのか見当がつかなかった。こういうとき、ただでさえ表情の読み取りにくいのっぺりした彼の顔はもどかしい。わけもなく焦ってしまふ。私は言った。

「私は史乃にとってはどこまでも悪人なんだよね。残念なことに」

「俺らから見たら、二人が二人ともやりたい放題だったけどな。それにいつか絶対借りを返してくれる悪人なんて、微笑んでるだけの善人よりいいかもしれない」沼男は言い、自分を指した。「俺みたいな」

そのわりにはちっとも微笑んでいない。沼男らしくなかった。機嫌が悪いのかもしれない。あるいは、彼もまた焦っているみたいだ。

史乃は翌日からは普段どおり登校した。彼女からの攻撃はやんだ。私をいらないものと思ひ定めたように、一切関わりをもとうとしなかった。

『やあ』

①冷える、冷たく凍る、②光や音などが澄み渡る」

「当たり前。これだけは覚えられそうだしこれしか無理そう。寒すぎる」

私たちは単語帳を閉じ、マフラーをうずたかく巻き直して川原あずまやの四阿から退散した。チカのおかげで私は古文の単語テストだけは成績を維持していた。彼女はバイト代がたいへんよろしかったと言ひ、ラーメンを食べに行こうと提案した。私は今日は「チカさん」と呼ぶことにした。「やあ」「さゆ」と連絡しながら自転車であどどついたラーメン屋は、宵の口なのにもう客がひしめいていた。もうもうと湯気の立つカウンターカウンターの向うにはなぜか店の人までひしめいていて、「根性」「やる気」「闘志」

と白く染め抜かれた揃いの黒Tシャツで立ち働いている。各テーブルには家庭のように紙箱のティッシュが置かれている。先に座っていた客が麵を啜る際に散らしたと思われる出汁つきティッシュが一枚、取り出し口からでていた。その手前のトレーに横たわっている割り箸にも歴代の色々がしみついていそうである。

「チカさん男前な店知ってるね」

びっしり結露したポットから水を注ぎ、私はコップを差し出した。

「男前に教えてもらったからね。沼木君に」チカは言った。

「沼男とも友達なのか。さすが」

ひっきりなしに飛び交う威勢のいい「いらつしゃいませ」「ありがとうございます」によって掻き消されると、あまりにもおいしく熱いラーメンだったのとで、私たちはほとんど無言で黄色い麵を啜った。額や鼻の下に汗が滲んだ。チカは件のティッシュを抜き取って鼻をかみ、ふいに言った。

「遅くなったけど、お誕生日おめでとう」

せっかく心を改めたのだが手遅れで、期末試験はあつという間に始まってしまった。ほとんどの教科の成績に暗い影が差した。授業中に全くノートをとらず、配られたプリントを適当に捨てたりしていた期間の分きつちり、頭の中に空白がふきだまっていた。気前のいい沼男やシロに借りて徐々に埋めた。体重は無断で四キロも増えていた。私は驚いて走ることにした。趣味人生の秘訣の全てをジョギングに注いでいる父が、正しいフォームやシューズ選びや休憩の取り方など、聞いているだけで痩せそうなくらい教えてくれた。ドーナツは揚げずに焼いた。軋むままにしていたドアの蝶番には油を差し、文字は丁寧に書いた。

彼女がどこでやる気を出しどこで力尽きたかがよくわかる、シロの世界史のノートを写していた夜、セツからメールが届いた。

『集会の日時が決定。十二月二十日午後七時より。駅の近くなんだけど、場所がわかりにくいし私が案内するよ。もし亜季も来れそうなら、十分

前に駅で待ち合わせでいいかな』

『ありがとう。参加してみたいです』

返信してから少し後悔した。でもセツともう一度会えるということが、後悔を不徹底なものにしていた。彼女の、あまり優しさは感じさせないばかりとした笑みや、ひらかれた両肩の線は、日当たりのいい高所の気配に似ている。

居間に移動して家族共用のパソコンを立ち上げ、イーダ会のアドレスを入力する。路線情報や天気予報以外でインターネットを使うことはあまりない。トップページにはチラシと同様の文言が配置され、写真やイラストのアイコンとともに〈設立の動機〉〈活動内容〉〈メンバーの声〉などのメニューが並んでいる。私にはそのサイトの使い勝手の良し悪しがよくわからなかった。壁紙は青みがかったトーンで、角度によってはまるで見えないほど薄い、鱗うろこの模様に覆われている。林の中、白いTシャツ姿で眩しそうに目を細めている室木むろぎの、画質の粗い写真が目立つた。その傍らにある〈設立の動機〉をクリックするとむやみに小さいフォントがびっしり敷きつめられたページに移った。

『私はもともと「自分」というものがあまりない子どもでした。将来の夢もありませんでした。成績は優秀でした。「勉強したくてもできない子どもたちが世界にはたくさんいるのだ」と、誰に言われるでもなく発破をかけられて、頑張って勉強したから。誰からというわけじゃないけど「お前は贅沢だ」と言われつづけて、だから人の嫌がることも進んでやりました。一流大学に入るまではスムーズでした。でもそこから先に進めなかった。自分の意見というものがなければレポートが書けません。講義はくまなく理解できるけれど何の質問も感想も思い浮かびません。それは当然批難の対象となりました。

就職活動中は辛かったです。何十社も受けました。でも、他の人にはない、私だけの取り柄をアピールするよう促されると頭が真っ白になるのです。社会から必要とされない自分を、惨めだと思った。でも決して、

生きることにおぎなりではありませんでした。自分に命があることは気に入っていたから。晩夏の風に勢いよく吹かれたり、まぶしい草みたいな色の小さな蛙を路上に見たりすると涙が出てくる。ただいるだけで、この世界は、何度でも何度でも美しい瞬間を経験させてくれる。

大学卒業とともに地元へ帰り、アルバイトを転々としながら、川の清掃や荒廃した田畑の再生など様々なボランティア活動に参加するようになりました。今思えばその頃は心がとても疲れやすかった。何をしても手を抜けなかったのです。どこにいても声なき声が、「何のうしろめたさもなくここにいる資格などお前にはない」と迫ってくるから。

そんな私に転機をもたらしたのが、今の「イーダ会」代表です。

その人はたった一人、炎天下の駅前で果てしなくドミノ倒しになっている違法駐輪を黙々と直していました。彼のそんな姿をもう二、三度見かけたことがあった私は、バスを降り、初めて彼を手伝いました。汗だくの彼は嬉しがりもせず一瞬うつろに見返しただけで、全てが整列するやいなや現場をあとにしました。彼による善い行いには、彼自身が選び取った形跡がありませんでした。その場を維持する「機能」そのものに近い印象なのです。この人は何かを知っているんだという気がした。彼の二の腕には鱗の刺青がありました。小さいのに不思議と目を引きましました。魚の鱗か、それとも蛇かと尋ねようとしたそのときでした。私は閃光のような予感につらぬかれたのです。「それが何であるかということとは問題じゃない、何かの一部であるということが重要なんだ」と。』

ごん、と心臓が重く鳴った。「代表」という人物が佐原^{さばら}さんを髣髴とさせた。

『私がボランティアに熱心だったのは、普通の気持ちで自然に、ここにいたかったからだと思ひ知りました。「お前は悪い存在だけれど、三時間善いことをしたから、三時間だけはうしろめたさをもたず存在している」。そんなゆるし、あるいは資格と交換するために取り組んでいたのです。

私は彼と同じ刺青を入れました。その場の「パーツ」として自分を捉

え直すことには、ドアを開けるような解放感があった。本当は手段としてなんかじゃなく、ただ透明に、人のためになることをしたいと願う自分がそこにはいた。私は鱗の原理を、「善」にだけ適用しなくてもいいのではないかと考えるに至りました。存在の資格なんてほしいと思わなくていい、自分が不可欠に機能する場を、作ればいいのではないかと。

私が聞き続けてきた声なき声の、どこまでが本当なのか、線引きは明確にはできません。しかしそれは、どこかのポイントからは、私の声でしかなかったと思います。自分で打ち立てた法律にすぎないと自覚しながら、なんとかそれに自分を合わせようとしていた。

私の変化は、同じサークルに入っていた少なからぬメンバーをも巻き込み始めました。彼らも私と同様資格を求め、その抛り所となるシステムとして結局「私」にしか行き着けず悩んでいたのです。けれどその単位を継ぎ目のない「私たち」へ広げたとき、「私」のコンディションもまた変質するはずです。

私たちが目指すのは、単なる個々人の集合ではありません。ドアを開いた人たちとの相互のつながりです。鱗の集まりようによって大きさも形も変わる「イーダ」。魚でも蛇でもない、未だ現れざる姿の獣。私は新しい「私たち」を生きたい。そういう場を、現実世界に置き換えたのが、自給自足の村なのです。代表はいわば、イーダの目です。私たちの誰よりも完璧に「パーツ」であり、だからこそ、私たちの作る新しい世界のモデル・中心である存在。私たちメンバーにも、「イーダ」を一個の命として機能させるための役割はありますが、上下関係は無論なく、全員がひとしい構成要員です。

我々の活動にご興味をもたれた方はお気軽に下記アドレスまでご連絡ください。代表のもとに集う日のご案内メールをお送りします。』

私はパソコンの電源を落とし、ざり落ちるように椅子を降りて水色の絨毯へ寝そべった。瞼を閉じて、「代表」と呼ばれ慕われている佐原さんを何度か想像してみようとしたが、そのたびイメージは硬直し、どこへともなく運び去られた。仮に予感的中していても、彼がその

会の代表を自認しているとは思えない。室木は佐原さんを自分に都合のいい方面へ解釈している。実像とはかけ離れたところで価値付けている。少し前までの自分と重ね合わせて、すうっと息苦しくなった。

南門の棕櫚しゅろの根元に、誰かの自転車の鍵が落ちている。音も色彩も半ばでふさがっているような曇った放課後だった。掃除当番の私は空になったゴミ箱片手にそれを拾った。キーホルダーの、目つきの悪い犬に見覚えがある。たしか沼男がよく輪っかの部分を指に通して回していた。景気よく吹っ飛んで持ち主とはぐれたのかもしれない。

教室に戻るまでもなく、ポケットに手を突っ込んで駐輪場に向う沼男と北岡君のうしろ姿を見つけた。二人は何かにもたれているように緊張感のない、しかしきつかけさえあればすぐ敏捷に粗野に動き回れそうな姿勢で、枯葉の上をぎくぎく歩いていた。私の追う音で振り向いた沼男は、時間をすべり落としたように、ふしぎと幼い顔になった。

「これ。南門のそばに落ちてた」

私が差し出すと一拍置いて沼男が何か言いかけ、北岡君の声がかぶさった。

「惜しい！ 沼男お前もう鍵、替えちゃったんだよな？」

「そう。意味なかったね」私は言った。

「なんで？ 意味はあるだろう。むしろこの鍵に対応する鍵穴を失った今、ここにはもう意味しかあるまい」

沼男は大げさな節回しで言った。なんだなんだ、と北岡君が笑った。沼男は笑わなかった。

「亜季の前でこれみよがしにしてきたわけでもないキーホルダーを亜季が覚えていたということに対する、感謝だ」

「マニアックな角度からの感謝だ」北岡君は揶揄やゆした。

教室にはもう誰も残っていないかった。鼻唄まじりでごみ箱を無造作に戻し、首のうしろを搔きながらスクールバッグを掴んで廊下の方へ向き直ると、沼男が戸口に突っ立ってこちらを見ていた。

「勝見さん」

呼称が姓だった。

「何でしょう沼木君」

いくつかの机を挟んで向き合ったまま私は言った。なんとなく近寄る気になれなかった。

「自分のしたいようにしかなないので、いいね。あこがれる」

「そうだね。けどあれも一種の才能ね。選べないのよ。『自分のしたいようにしかなない』っていう生き方をしたいと、本人が望んでるとは限らない」

私は沼男が佐原さんのことを話しているのだと思った。

「すげえヒトゴトな意見だな」沼男は細い目の端にしわをつくって笑った。「勝見さんのことなんだけどな」

「私なんてとても」思わず吹きだした。「あの世界で頭角を現す自信ないわ」

「でもあこがれるし、いいなと思うし。あのさ、もうかなり好きなんだよ」

そのとき私はなぜか黒板の上の時計を見た。針は相変わらず少し遅れていた。しかし今が今であることはずしんと叩き込まれるようにわかった。沼男が時おり見せる独特の鋭さもあどけなさも憂いも温かみも、その顔へいつときに強くあらわれていた。急にそんな、色んな絵の具をぶちまけたような顔しないで、と言ってしまいそうだった。

「うれしいけど」私は立ちつくしたまま言った。「なんて言えばいいのかわからない」

「わかったら言うって」腕組みで沈黙考した沼男はそう言い、「まさか一年もかからないよな？」と念を押した。

私たちはばらばらに帰った。沼男に対する答えが、是も非も自分の中にはないようで、変に軽い足取りで駐輪場まで歩いた。もちろん彼を好きは好きだが、やきそばが好きとか鶴が好きとかいうのとあまり変わらないのに「私も」と応じていいとは思えなかった。いつの間に降りだし

たのか、トタン屋根に当たる雨音が腹の底まで響いた。自転車で走るとレインコートのフードは、水だらけの風に煽あおられてすぐ外れた。かぶり直してもかぶり直しても煽られた。

七時をすぎたがセツの姿は見当たらなかった。私は駅舎の柱にもたれ、改札口から時々まとめて流れ出す背中群れを、短い川の行方を眺めるように見ていた。やがて波間から、すばつとセツが顔を出した。こちらに気づいてから笑いかけるまでの一瞬、彼女の浮かべた空白の表情が、街灯の下で映えた。

「ごめん。行こう」

大声をかけるなりセツはもう背中を見せる。私は駆け足になった。「そこで重そうな荷物持ったおばあさんとすれちがったから」陸橋を顎あごでしゃくって彼女は言った。「階段の間だけ持つて下りてあげるつもりだったんだけど。読みが甘かったの、言葉巧みに誘導されて家まで運ぶはめに」

私は「セツでも読めないことってあるの」と感心して言った。さつき彼女は、あれほど離れていたのにひと目で私の変化を見抜いた。何かを見抜かれるときは、それが自分に定着するときでもあるのかもしれない。お互いに無言でもわかってしまう。半歩先を歩くセツは「ええ？」と、聞き返すように、笑うように振り返った。

「親切なんだね」少し大きな声で私は言った。

「こう見えて、って言うほど華奢きゃしゃじゃないけど、力持ちなんで。荷物持たないときのその力って余ってるから貸し出したんだよね。それだけポコッと取り出せたら、『自由にお持ちください』の箱に入れておいて、私ごとついていなくても済むのにな」

「感謝されたいって気持ちには全然ないんだね、セツも」

『もっ』

わがままと街の美化が一致してしまっている慢性疲労の佐原さんを念頭に置いていた私は、まっすぐには答えずに言った。

「だけどおばあさんは、出どころのわからない力瘤ちからこぶを自分の腕にくっつけるよりも、自分のためを思ってくれたあなたに感謝したいかもよ」

わずかに振り返りながら歩いているセツは目を細め、「そんなやわな老人じゃなかったんだって」と言った。腕を伸ばして私の肩を引き寄せ、きつちり隣に並べると手を離れた。私はひとりごとみたいに言った。

「激変してる、セツの服の趣味」

いつもの、良く言えばアーティスティックな、悪く言えばぼさっとした袋みたいな服とは打って変わって、細身の真っ黒なロングコートをさばくピストライプのパンツも大胆なカットのハイヒールも、隙がない。「ていうか全然趣味の違う友達二人から、処分予定の服を譲ってもらってるから。季節が終わるごとに」セツは言った。

「どんなのでもいいわけ、そもそもセツはどんなタイプが好きなの」

「さあ。長いこと自分で服を買ってないしな。サイズがきつくないやつが好き」

普遍的すぎて条件ではない、と言う前にたどり着いた。

商店街から折れる細い路地に面した、どことなく終末感の漂うアパート。廊下の蛍光灯が二箇所も点滅している。残る全ての蛍光灯は切れている。案の定、佐原さんの棲家だった。当然、私が彼女と全く同時にそこで足をとめたことを、見逃すようなセツではなかった。

「亜季ひよつとしてこの場所を知ってた？」

「ホームページで代表ってされてた人、佐原さんなんだね」

旅先で道を尋ねる人のようにこだわりのない声音で、彼女は訊いた。

「あれ、君ってどこから知ってるの？ サイトには名前出してないのに」

「エコイベントでセツに、私の命を救ってくれた人の話をしたじゃない？」

その人があの人か、わかるわかる、とセツはアパートの二階を見上げて笑った。佐原さんの部屋には灯りがついていて。彼女はヒールの音を響かせて階段をのぼり始めた。鉄骨階段の踏み板と踏み板の間から、一

階の住人の洗濯機が見える。私は止まっていた。

「行こうよ。彼と一緒にいて唯一いい点って、相手の心を損ねないか心配しなくてすむことだよ。最初から損なわれてるからさ」

セツの声が降ってきた。

「そんな人を代表にするなんてどういうつもりだ、と訊いてみたいけど」

相手が関係者なのでせいっぱい婉曲的に私は尋ねた。

「私以外のメンバーは、あの人の損なわれ具合を本質的に理解してないからね。私は彼の恋人だったからいやというほどわかってる」

セツはこともなげだった。私は、自分の心がサツと大きな布で隠されてしまったようになって、驚いたのかそれほどでもないのか自分でもわからなかった。その場をただ静かに膨らますような風が吹いていた。

入ってみると佐原さんの部屋には立派な円座ができていた。若い男女が入り混じって十二、三人はいる。いくら人の良さそうな人相ばかりでも、マスゲームのように一斉にずらっと見上げられるとやはりたじろいだ。いつもの卓袱台は片隅に移動している。佐原さん本人は輪に加わっておらず、背中を向けて奥の文机で仕事中的ようだった。初参加の勝負見垂季さんです、というセツの声で鉛筆片手に振り返った彼は、苛立ちだけで形成された笑みを口元によぎらせた。とうてい微笑み返せなかった。室木はあそこないだの、とすぐに立ち上がって迎えてくれた。彼の隣にいる女の人が私の方を一瞥してほっとしたような表情になった。

「こちらは同じく入会希望の目黒さん。ちょっとつめてあげられる？」
室木に促されたその人の隣で私はできるだけコンパクトに正座した。ちようど向かい合うあたりへセツも割り込んだ。よろしく、と小声でこちらに顔を向けた目黒さんは、室木同様どことなく年齢が霞んでいた。しかし彫りの深い、何か意味ありげな顔立ちであった。

「では改めまして」腰を下ろした室木が軽く両手を打ち鳴らして言った。「どうしてイーダ会に関心を持ってくれたのか、どんな些細なことでもいいから話してもらえるかな。じゃあまず、目黒さんから」

彼女はしばらく言いよどみ、薄い声で話しました。

「死ぬ理由がないのに死にたいこと、幸福な場にながらも幸福じゃないということに、私は罪悪感を持っているんです」

目黒さんの指先はプリーツスカートの襷に沿って丹念に行き来した。「私の中にあるのが、『なんにも悪いことをしていない自分がなぜこんな粗悪で絶望的な環境にいるのか』という問いであれば、私は幸せな世界に導いてくれる答えを探し求めると思います。でもそうじゃなく、『善い志なんて何も無い自分がなぜこんな安全で清潔で明るい場所にいるのか』だからあとがない。罪悪感しか出てこない。だから答えを探すんじゃなく、問いをなくすことでしか、心の落ち着きを得られないんじゃないかと思って」

私は何気なくバケツを見遣った。この家のただでさえ狭い三和土^{たたく}には、いやに側面のへこんだ銀色のバケツがあり、ひよっとすると気に食わない訪問者の頭を打ちのめす道具か、と私は以前から内心おそれている。目黒さんは続けた。

「もう私は自分の中を無視したいです。幸福な場のパーツになってしまったために。だから、一枚だけの鱗を彫ってほしい」

仕舞いまで明瞭に言えず、彼女の語尾はゆがむように消えた。室木が「ありがとう」と話を引き取り、円座からはいたわるような拍手が湧いた。目黒さんはそっと長い息を吐いた。人々の目線は当然彼女の隣へと移った。

「この間、学校の屋上の柵の外側を歩きました」私は言った。「自分の中に潜んでいる死がせり上がってくる感じがしました」

盗み見ると佐原さんは全然聞いていなかった。正座して鉛筆削りの手動レバーを高速で回していた。私は笑いそうになって目を逸らし、思い出しながら言葉をつないだ。自分の死が、自分の思いではどうしようもないものとして、めきめきそこにあつた感覚。それに匹敵するものをさがし、悪として実を結ぶかもしれない素を無数に持っている自分自身に行き当たったこと。たとえ自分の意志に従った善い行為であっても、そ

れは私自身の思いを超えていく。私は一旦口をつぐみ、ショートパンツから出た黒タイトの両膝に一つずつ拳を載せた。

「すみません、何が言いたいかっていうとつまり、屋上でそんなふうに考え直せたのはイーダ会がきっかけかとも思うんです。完結なんかしてない存在なのに、完結した存在として自分を設定しようとしてたから足もとが全然不安定だったんだってわかった」

「それで入会を希望してくれたんだね。ありがとう」

室木はマイルドすぎる表情をさらに柔軟に広げて言った。

「いや、それが」私は慌てて顔の前で片方の手を振った。「入会はやっぱりいいです。紛らわしくてすみません」

目黒さんがバネ仕掛けに似た勢いでこちらを向くのがわかった。私はセツの方へ顔を上げた。膝を崩して座っているセツは、微笑むでもうろたえるでもなく淡々とこちらを見つめ返した。私は言った。

「鱗の刺青を入れないままで、見ていたんですけど」

「彫り物ほものという点に問題があるわけではなく？」

室木は言った。私はうなずいた。

「あれから私は、自分以外の人々の中にもああいう素がいっぱいせめぎあっているんだなと思うようになって。自分の中にある、一体どんな方向へ転じていくかわからないものを思うと、今ここにいる自分だけじゃ足りないような感じがするし、他の人たちもそれは同じじゃないかと思いません。そのときに必要なのは、自分以外の人たちの色んな価値観とか生活感かもしれない。できればそれらを等しい距離でキープしておきたいです。何か一つ自分なりの価値観を決めてそこに定着するんじゃないか、あちこち行き来できるように」

「変だな、君の考え方はイーダ会にとってもよく合ってる。どうして、入るんじゃないか見ていたんだらう？」

「イーダ会のこともまた、色んな考え方のうちのひとつとしてキープさせてほしいし」

部屋は静まり返った。階下からのテレビの大音量が駆けめぐっている。

室木の顔が白かった。「気を悪くされましたか」と私は辛うじて訊いた。「まさか」彼はにこっとした。「少し目が回っただけだ」

円座の向こうからセツだけがくつきりと拍手した。つられた拍手がぱらぱらと起こった。佐原さんは入魂の指捌きで辞書を繰っていた。

「もなかを頂きましょうか」

セツや室木より少し年上に見える髪の短い女が、人の輪の真ん中に置かれていた未開封の菓子箱に手を伸ばした。その包装紙を知っていた。エコイベントの帰りにこの家へ立ち寄ったとき、佐原さんが黙々とメモ帳に仕立てていたものだ。

「ムロさんのご実家って老舗の和菓子屋なんだよ」

雰囲気は学生みただがスーツにネクタイの男が、輪から身を乗り出して教えてくれた。ようやく私は、佐原さんの姉の俊子さんがこのもなかを毛嫌いする理由を察した。弟が代表を務めると言うおそるべき同好会の存在を、彼女も知っているのだ。台所に近い場所に座っていた数人が、勝手知ったるといふ動きでお茶の用意をしていた。若白髪の男が湯呑みを茶托ちやたくに載せて佐原さんのもとへ運ぶ。佐原さんは仕事を中断させられて舌打ちしただけだったが、男は満足そうな口もとで部屋をよぎった。

会合はなごやかに再開された。真冬なので誰の刺青もセーターやジャケットの下に隠れており、一見すると人相の良い人たちのお茶会である。しかし議題は「最近自分がいかに『パーツ』になれたか」「認識がどれほど深まったか」であり、人々は並んでいる順に報告していく。日常的に人助けをするよう心がけて以来、自分もいかに普段いんな人に支えられているか考えた、という人もいれば、宇宙の秘密に迫る本を読んでもますます自分をちっほけな存在だと実感し、しかしイーダ会のおかげでそのことを全的に肯定できた、という人もいた。

司会役の室木は一人一人を褒めるのが巧みだった。各メンバーの言い分も理想も結構ばらばらなのだが、褒めるといふ形でそこから何かを取り上げる際に、トーンを均していく。

この人が代表になればいいではないかと私はつくづく室木の横顔を眺めた。彼は佐原さんについて、以前の私みたいに、不正確な解釈をしている。それは、白い壁に伸びるグレーの影を白ペンキで塗りこめようとするみたいなものだったと、彼に言いたくなる。けれど私と違うのは、室木が確かに賛同者を得て、現実に関保していることだ。そもそもなぜ佐原さんが彼らをのさばらせているのか、それが大きな疑問だった。様子を見る限り、佐原さんがメンバーたちに「死にたいときは死んでくれ」級の打撃を与えているとは思えない。

二時間ほどで解散となった。代表は校正以外何もなかった。それじゃ代表、失礼します、と室木が背中に声をかけてやっとなら佐原さんを手をとめ、せんべい座布団の上で体の向きを半回転させた。それが決して最後にありがたいお話をしてくれるためでないことは、部屋を見渡す世知辛い目つきを見ればわかった。畳の上に菓子屑の一つでも落ちていたらやかましく言い立てるためにちがいない。一方メンバーにはそんな行儀の悪い人は混じっていなかった。湯呑みは洗い、使った布巾は干し、移動させていた卓袱台は寸分違わず元に戻してある。彼らは口々に礼を言った。佐原さんは時計を見て「まだいたとは」と嫌味を言ったが、二度と来るなとは言わず背を向けた。もう私と目を合わそうとはしなかった。

曇っていて月の位置がわからない夜空を見上げながら歩いていると、セツが「亜季を連れてってよかった」と言った。

メンバーたちとは辻々で分かれ、今は私たちだけだ。

「あんなこと言ってごめん」私は視線を路上におろした。

「謝らなくていいよ」

「そう言ってくれる気がして、謝るの忘れてた」

「なんとなく亜季の輪郭が変わったなあとは思ってたんだ」

「四キロ増。走ってるよ」

「体型じゃなくて、輪郭の質ってこと」

「それっていいことかな」

「うん」 涙はなをすすってセツはコートの衿えりを立てた。「でもまた変わっていくかもしれない」

「そりゃそうね、事故とかに遭ったらまたころっと」 私は言った。

「交通事故に限らずだと思うね」

「そう？」

「大恋愛とか」

私は笑った。しかし笑っている場合ではなかった。そろそろ沼男に対して何らかの応答をしなければならぬ。明日で五日が経つ。

沼男はこういうことをし慣れているのか、あれ以降も態度を不自然には変えず、私が何か捨てようとする「エコはどうした」と野次を飛ばすし、廊下の角でぱったり出くわしたときは「まだですか」と真顔で尋ねてくる余裕を見せた。

「また来れる？」

セツが言い、私は我に返った。

「私に入会する気がもうないこと、駅で会ったときから見破ってたでしょう？」

「でもある面では共感してるし、行けるとこまで一緒に行ってみようかと思ってるでしょ？ ツアーの団体客に紛れ込むみたいに。私も、そうだから。ただしその行き先をそれとなくずらしていつちやおうと思ってるところが、君と違う点かな。まあ、メンバーになるとかならないとかって、つまらないことだよ」

傾斜した細い電柱のある辻でセツと別れる間際に、一つだけ質問した。

「佐原さんのアパートの部屋の表札って、セツの字なの」

「ああ、あれまだ使ってるんだっけ。うん、一緒に住んでたときに」

私はうなずいた。私の心を隠したあの大きな布の、温度のない、しんとした感触が残っていた。

翌日は古文単語暗記の曜日で、いつものように私は四阿の腰掛でチカ

に問題を出した。彼女は「沼木君もう告った？」と逆に訊いてきた。私の頭は覚えたての単語を一つ残らず見失った。

「なんで知ってるわけ」

「あの人、私に相談してきたから。亜季のこと。一体、亜季からも好かれるという可能性があるかどうか」

川は冷たい水をたたえて静かにすばやく流れていた。枯れ薄すすきの陰で誰かが詩吟の練習をしている。

「そういうことを人に相談する人だったのか」

私が言うとチカは批判的な声を出した。

「それくらい不安だったんだと思うよ。自分に対して亜季が一体どのレベルまで無関心か、度合いがわからなかったんでしようよ」

彼女は単語帳を膝の上に置き、「彼はすごくいい人だと思う」と険しい目のまま言った。勧めているのかと私は尋ねた。枯れ薄の彼方の詩吟が大迫力だった。チカは言った。

「亜季が沼木君の彼女になりたいと望んだことがいっぺんたりともないのほもちろんわかってるよ。でも沼木君にはそうは言わなかった。亜季が、他の誰に対してもそう望んだことがないって知ってるし」

私が腕組みをしようとする、チカは私の肘を引っ張って阻止した。むっとして私は友人の顔を見た。彼女は言った。

「腕組みなんかしてる時間があったら沼木君のことに集中しなよ」

そこまでありがたがることなのか、と思ったが、言えなかった。チカが、「言うな」という顔をしていた。言ったら金輪際縁こんりんざいを切るに違いのない形相であった。私はじっとそのおそろしい形相を見つめていた。そのおそろしさを成り立たせている、チカの中の温かみが、私の温かみの欠如を探り当てて移ってくるような、奇妙になまなましい感触があった。

「亜季、とりあえず状況に乗っかってしまえばまた見る角度も変わると思うよ。今だってすでに見方は変わってるでしょ、沼木君に打ち明ければから」

「うん。私の中で沼男の意味が、ってだけじゃなく、自分の意味も」

チカと見合ったまま、私は徐々に実感しはじめた。一人の人間に一人の人間として選ばれることの、きつい喜びを知る前には、もう戻れないのだ。そして、その場で嘔吐おうとしそうなくらいどきどきしてきた。急速にわかってきたからだ。沼男が私に与えたのと同じ種類の手ざわりの影響を、私が与えたい人が誰なのかを。

流れる水の匂いをかきながら、私は佐原さんの夢をたどっていた。右手を上げれば右の部屋が盛り上がり、左足の向きを変えれば廊下が引きずられる。間取りが自分の肉体に連動する夢。

佐原さんの捨て身の善行は、気に食わない「瑕疵かし」を一掃して自分自身がこざっぱりとすごすためなのだから同情無用と俊子さんは言うが、そうだろうか。佐原さんの悪夢は、自分の行為こそが「瑕疵」を引き起こすときの感覚が、よみがえったものじゃないだろうか？ たとえば、自分が代わりに処分したがために、かえって不法投棄をする人が増える。道を尋ねてきた人に地元民しか知らない近道を教え、その路上で旅行者が通り魔に遭う。トラックに撥ねはられそうになっているところを助けてあげた子どもが、始末に負えない十六歳に成長する。もう彼の手を離れたはずの無数の物事の展開に、彼の無数の意識はどこまでも結びついていく。幾層もの幾層もの響きの中、そこから出て行くことなく突っ立って、見えない不協和音を睨にらんでいる。

きつと世界は彼が認識しているようなものではない。彼が世界だと思っている場所には彼しかいない。しかしずっと一人だけ例外がいた。私だ。昔たつた一度彼に救われた、そのことに、救われ続けようとした。私は確かに、引きずられる廊下と同じ構造だった。

私の認識の内ですっと同じ位置にいた沼男は、あの雨の放課後、そこからいきなり大移動した。もし私も、他人の認識の内での自分の意味を動かすことができるなら、それは誰よりもまず佐原さんであるべきだ。佐原さんの世界から出たことを知らせなければ、彼はいつまでも左足が重い。私はチカにこの気持ちを表明した。彼女は剣幕をゆるめたが、その代り表情が曇った。

チカと別れたあと、沼男の家に向った。行ったことはないがマンションの場所は知っていた。あたりはすっかり夕闇に吞まれている。渡ったことのない橋を渡り、見知らぬ八百屋で、中に火を宿したような林檎をいくつか買った。

街外れのまだ新しいマンションにたどりついて私は彼の携帯に電話をかけた。

「今おたくのマンションの自転車置き場にいるんだけど」

沼男は「俺がまだ帰ってない」と驚いていた。

「信号あと二つ、くらしいの距離。もうすぐ着くけど」彼は言った。「こないだのことだよな」

「うん。すぐうれしくて、人生観にまで徐々に影響してる。けど沼男が私に言ってくれたようなことを、私は佐原さんに言おうと思ってる」

「それは、すごい。色んな意味で」

さすがに間が空いてしまった。私は八百屋の薄茶色い紙袋を眺めて言った。

「もう着く？」

「このなりゆきでのこのこ着けると思う？ さっきから、青信号なのに止まりっぱなしなんだよ」

「林檎を買ってきたんだけど」

「誰かを振るときに手土産もってくる奴があるか。どの自転車のカゴにでもいいから突っ込んでいてよ」

私はあるがとうと言った。本当に言いたいのは、沼男のことを非常に好きだということだった。しかし紛らわしすぎるのでそれは黙っておくしかなかった。私は手近なカゴに八百屋の袋をどきっと入れて、自分の自転車にまたがった。マンションからどれほど遠ざかって、林檎の色が目の中で終わらなかった。

「来んなって」

ドアを開けながら佐原さんは早くもそう言っていた。凄むでもなく本

当に嫌そうにぼそつと言うのを聞いて、私は焦った。首にかけたスポーツタオルで真っ黒な髪を拭いている佐原さんは、湯上りらしくまだほかほかと湿っていた。

「一応確認だけど、それはイーダ会の入会希望者としては、つてこと？」

「くそつたれ」

「佐原さんの恋人にしてください」

私はとにかく言った。佐原さんは髪を拭いていた手をとめ、だらりとした体の横へ下ろした。たくし上げたスウェットの袖からのびる腕は、鍛錬を積み重ねてきたような固く締まった筋肉と、死者を連想させる色艶の悪い皮膚とを両立していた。

「足もと見やがって」やがて彼は、彼の眉間の歴史を塗り替えそうなほど深いしわを刻んで言った。「わかった。でもどうやったらそこまで憂鬱な提案が可能なんだ？」

「ん？ いいの？」私は混乱した。

「黙れ。いいに決まってるだろうが」

派手に緊張していた私はそのとき、私のわがままなら何でもきかねばならぬという彼の血迷った掟のことを忘れていた。だからただもうほつとして「よろしく」と言った。佐原さんは三和土の隅に置かれたアルミのバケツを無言で蹴飛ばしてから、「よろしく」とうめいた。

〈続く〉

牧田真有子（まきた・まゆこ）

80年生。「椅子」で「文学界」新人賞奨励賞を受けデビュー。人が抱く寄る辺なさと、世界が孕む不確かさを、丁寧にすくいあげ描きとる。主な作品に「夏草無言電話」（「群像」09年5月号）、「予言残像」（「群像」10年6月号）、「今どこ」（「WB」20号）、「合図」（早稲田文学記録増刊 震災とフィクションの「距離」）など。

早稲田文学・オン・ウエブ

copyright by Makita Mayuko 2012
published by wasedabungaku 2012